

技術士第二次試験 合格体験記

建設部門（鋼構造及びコンクリート）
上北建設(株) 土木部 音道 薫

1. 受検動機

高校卒業後、現在の会社に勤めて間もなく高校の仲間と会い、技術士は難関試験のため地方の建設会社には取得者がいない話をした記憶がある。そのとき、自分が取得して誰でも（高卒や地場ゼネコンでも）技術士を目指せることを示したいと考え、「いつかは技術士になる」と決意したことを覚えている。

その思いを強くした要因には、家庭に経済的な余裕がなく大学進学を諦めたこと。また、高校を卒業する平成初期の頃から世間では能力主義による上昇志向が強くなっていったことなどがある。そのため、仕事ができる能力を身につけ、かつ資格を取得すれば会社に評価されると考え、それこそが私の励みであった。また、大学に行かせてあげられなかったことに対する、親の後ろめたい思いを断ち切るのためにも努力することは必須であった。その思いは、いまでも変わらない。

2. 受験申込書

受験申込書の業務経歴と業務内容の詳細（小論文 720 文字）は口頭試験で質問を受ける大事なテーマだと聞いていた。そのため、2月上旬に素案を作成し約2週間おきに見直しによるブラッシュアップを繰り返した。小論文では、限られた文字数で「業務名」、「背景と課題」、「立場と役割」、「技術的解決策」、「成果」、「現時点での評価」の6項目をいかに分かり易く表現するかを心掛けた。特に、技術的解決策では技術力をアピールしたい思いが強く、あれもこれも盛り込みたくなるのが人の心情です。しかし、解決策を多く記載すると薄い内容となり、口頭試験で得意でない部分を質問されるリスクが高まる。そういったことも理解し、早い段階で業務内容の詳細を起こし、定期的にブラッシュアップすることで無駄な文章を削り、要点の明確化とコンピテンシーを意識して記載することが大事である。

3. 筆記試験とその対策

私の場合、1月から試験勉強を本格的に始めた。まずは、付箋紙に勉強内容を書き、それをいつまでに達成するか決めてカレンダーに貼り付け目標を定めた。例えば、「願書の素案 2/15 まで」や「想定問題の解答作成 3/20 まで」などである。こうして試験日までの勉強内容を明確にした。この時、あえて余裕のないスケジュール

ルとし、さぼる余裕を自分に与えないようにした。また、毎日の勉強時間をカレンダーに記入することで目標に対する行動力を見える化した。

勉強の初期段階では、願書の小論文の構成や、必須Ⅰおよび選択Ⅱ・Ⅲの想定問題の作成と骨子に合せたキーワードの作成を行った。次に、過去問の復元解答を参考にしながら想定問題の解答案の作成を行う。解答案ができたなら、実際に書き込みを行いながら文章の修正を繰り返し、ブラッシュアップを行った。この時、特に注意したことは、以下の3つである。

➤ ワンセンテンスの長さを意識する

1つの文章が長くなると、主語・述語が分かりにくい曖昧な文章やねじれ分になりやすい。試験官に伝えたいことを明確にするために、多くても3行以内とした。これを意識することで、無駄な文章が削られ読みやすくなる。

➤ 接続詞と助動詞・助詞の使い方を意識する

接続詞では、「または、もしくは、なお、さらに」、助動詞・助詞では「ような、まで、など、ともに」はひらがな書きとし、「ため、だが、ので、また、しかし、さらに」の乱用は避ける。さらに、助詞の「が、は、を、も」は使い方によって、意味が変わるため伝えたい内容になるよう意識する。

➤ 論文展開で次の展開が気になる文章に

必須Ⅰや選択Ⅲにおける課題の解決策は、最も大事な部分である。そのため、私はあえて結論から論じて「なぜなら、」で背景・条件・目的などを述べ、最後に解決策の効果を述べるようにしている。そうすることで、読み手側は結論の理由が気になるし、読むとスッと頭に入り理解しやすいと考えている。

4. 口頭試験

試験対策は、過去の質問内容を整理し業務内容の詳細に沿った回答を作成した。想定した質問数は、200問弱とかなりのボリュームとなった。回答を作成する時は、「書き言葉」になるが、実際の面接では「話し言葉」となるように注意した。また、1つの質問に対する回答は30秒～1分程度となるように意識し、質問数が多くなるよう心がけた。質問を多く受けることで、各課題の加点が得やすいためである。逆に質問数が少なければ、加点を得られないため不合格になる可能性が高くなる。

5. おわりに

入社し30代に入るとキツイ現場が多くなり、自分が想像していたより技術士取得が遅くなったと感じている。それでも、18歳で決意したことを実現できたのは自分にとって大きな自信となった。

今までも、そしてこれからも自分の意志によって起こす行動にこそ意味があると思っています。だからこそ、「意志あるところに道はある」。そう信じています。